The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	米国文化におけるエイズと「ライフスタイル」概念 : エイズ出現直前の米国「個人主義」文化の分析
Author(s)	田中, 雅彦
Citation	年報人間科学. 1995, 16, p. 127-143
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5121
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

米国文化におけるエイズと「ライフスタイル」概念

エイズ出現直前の米国「個人主義」文化の分析

田中　雅彦

〈要旨〉

本稿の目的はエイズ出現直前の米国の文化状況を文化分析によって把握することである。それは、とりわけ一九六〇～七〇年代にかけて、米国「個人主義」文化内に何が起こったのかを理解することである。そしてこの作業は、現在の米国にみられるエイズ現象（特に「犠牲者非難」）を分析するための準備である。

エイズと「ライフスタイル」概念との関わりに注目するのは、個人を強調する方向に「個人主義」解釈が進む時代において、この新しい概念が果たした役割を見極めることが本稿の目的にとって重要だと思われるからである。今回は二つの「ライフスタイル」概念を取り上げ、それが生じる文化・歴史的背景を追っていく。一方は「自己表現」として用いられたものであり、他方は公衆衛生学において使用されるものである。この新しい概念は、米国「個人主義」文化が独自に持つ世界観やエトスの中で組み立てられ、解釈され、生じたものである。こうした概念が絡んでくるために、エイズ発生後に米国で生じた「犠牲者非難」は独自性を帯びることになる。本稿はまた文化分析を中心に置いている。これにより「ライフスタイル」概念や「犠牲者非難」は、文化的真空ではなく「文化」のなかで生じることが示されている。

キーワード

エイズ、「ライフスタイル」概念、米国「個人主義」文化、文化分析、「犠牲者非難」

I　はじめに

一九八一年に最初の患者が報告されて以来、米国においてエイズに関わる様々な言説が大量に生産され続けている。そこでは「犠牲者非難」が現れ、またそれに対する反対も同様の激しさと速さで生じている。この混乱とも呼べる状態が現在起きている理由を理解するには、エイズ出現直前までのとりわけ一九六〇～七〇年代にかけて米国「個人主義的」文化内で何がおこっていたのかを知る必要がある。こうしたエイズ直前の文化状況を文化分析により把握することが本稿の目的である。筆者は文化分析を軸とした米国のエイズ分析、つまり現在の（特に「犠牲者非難」の）状況を対象とする研究への足掛かりとして本稿を位置づけている。米国のエイズを米国文化において読むという、一見当たり前ながらほとんどおこなわれていない作業のための準備段階といっても良い。

また論題が示すとおりエイズと「ライフスタイル」概念との関わりに注目するのは、エイズ直前の状況が作り上げられる際に「ライフスタイル」という新しい概念が果たした役割を見極めることが、本稿の目的にとって重要だと思われるからである。

「ライフスタイル」という言葉は生活様式や生き方をあらわすものとして日常的に使われる機会が増えているが、使用される文脈や領域の違いによってその意味も変化する。今回はエイズとの関わりを考えた場合に重要と思われる二つのものを中心に取り上げる。

まず一つめのものとして、最初のエイズ患者が報告される直前までに米国文化のなかで特殊に発達してきた、「自己表現」としての「ライフスタイル」概念がある。ここで使われる「ライフスタイル」という言葉は次に述べる公衆衛生のものより広い（その人のアイデンティティを含めた生き方全体に関連してくる）意味を持ち、また米国文化が持つ独特のエトスの中で作り出されてきたものである。しかも一九六〇～七〇年代という文化的にも政治的にも特徴的な動きを見せた時代を成立の背景として持っている。

次に公衆衛生において使われている概念がある。これはおもに慢性疾患予防のために使われる概念であり、疾病分布の大幅な変化とともに確立した。しかしエイズに対する予防としても、その病原が確定できなかったために使用された。感染経路が確定した後も根本的治療薬がないために「ライフスタイル」式予防法が推し進められている。現在までに、エイズ予防の対象となるカテゴリーは、ハイリスクグループからハイリスクビヘイビアーへと変わってきている。しかし彼らが定義する「ライフスタイル」に注目し、「正しい知識こそワクチン」として行動変化、つまり「ライフスタイル」の変化を求める教育をおこなっていることに変わりはない。

本稿では以上二つの「ライフスタイル」概念が生じてくる流れを追っていくが、この概念が関係しているためにエイズ発生後に米国で生じた「犠牲者非難」は他の時代や場所のものと違った様相を帯びることになる。今回は、具体的な事例をあげてその独自性を示す方法を取らない。その代わりに、エイズ直前の文化・歴史的背景を

スケッチすることで、米国「個人主義」的文化内においていかに「ライフスタイル」概念が生じ「犠牲者非難」の米国的表現が用意されるにいたったのかに関する見取り図を描こうと思う。まずその際に文化分析が果たす役割を概観してみる。

Ⅱ　文化分析から見た「犠牲者非難」

「ある人びとの文化を理解することは、彼らの個別性を稀薄にしてしまうことなく、その通常性を明らかにすることである。」[1]

このC．ギアツの言葉は文化人類学、文化分析[2]における出発点であると同時に到達目標でもあると思う。[3] しかし、この言葉の根底に流れる思想は何も目新しいものではなく、出発点としては人類学に馴染みのものである。

「人類(anthropo-)」という種、もしくはそこで前提とされる「人類の基本的統一性」をその視界に入れつつ、同時に小規模で特殊性や独自性を持つものとして異文化を研究してきた人類学は、通常性（普遍）と個別性（特殊）という両極を同時に取り扱う視点を持っている。それを学説史的にみれば時代によって個別に傾いたり普遍を強調したりと、そのあり方は様々である。この両極を行き来する振り子の位置取りを調停することは簡単なものではなかったし、調停の困難さが原動力となって人類学の思想を次の段階へと押し進めたともいえる。[4]

こうしたことを考慮に入れるならば、先の引用文が、到達目標としてはあまりにも都合の良いものにみえるかもしれない。しかし文化分析は通常性と個別性という両極を同時に扱うものであり、そこでは通常性を重視して個別性を軽視する態度や、その逆の態度をとることはできない。

ここからギアツ特有の意味・象徴概念や「意味と象徴のシステム」として文化を捉える作業を前提として文化分析について考えてみる。

まず彼の使う概念の特徴として重要と思われる点をとりあえず三つだけあげておく。[5] まず「『いかなる物体、行為、出来事、質ないし関係でも概念の運び手となるもの』が『象徴』であり、『その[運ばれた]概念がその象徴の意味である』」[6]ということ。次に「特定の象徴と特定の意味とを結びつけているのは…特定社会に生きその象徴を所有し使用している特定の人々である」[7]こと。最後に象徴は公共的で観察可能なものであるということ。それは「普遍的な法則や神秘的な過程や隠された論理によってではなく、日常的公共的常識的な実際の社会行動の場」[8]において象徴と意味が結びつくということである。

こうした概念を利用する文化分析とは「特定文化自身の内に含まれる解釈を解釈するという『二重解釈学』の作業」[9]である。ある文化に属する人々はその文化特有の意味を持つ象徴を使うことで彼らの世界を構築し、またそれらを彼ら自身が読み取り解釈している。このように彼らが生を営んでいる状態をさらにわれわれが彼らの

「肩越しに」読み取ること、それが「解釈の解釈」をおこなう文化分析である。こうして象徴と意味の「解釈」を中心としたアプローチとして文化分析を位置づけたならば、[10]通常性と個別性をそこで同時に扱うとはどのようなことなのか。次に「犠牲者非難」を文化分析する場合の例を取り上げて、それを示していく。

病者や感染者に対する差別、病気に絡む差別は人間の歴史を通じて世界中のあらゆる場所にみられる現象であると言えよう。病気に罹った理由を病者の道徳的欠陥や社会的ノルマの不履行に対する当然の帰結として説明し、その責任を病者に帰して非難する「犠牲者非難(victim-blaming)」という現象、また梅毒をイタリア人はフランス病と呼び、一方のフランス人はナポリ病と称したという十五世紀末のエピソードに端的にあらわれているような「病気は『外』から来る」という病気観など、病気に関する研究で頻繁に扱われているこれらのものは場所や時代を問わず繰り返して現れてきている。

さてこの事実を知る者ならば、医療人類学の最初期のテクストから、D．ランディによる次の文章を読む際に少し違和感をおぼえるに違いない。

「前産業化社会は個人の行動に関してその当人の責任と過失とを非常に強調する。そのため健康の維持は通例複雑なタブー体系の遵守を必要とする。そして社会的・精神的・道徳的法を犯したのであるから、病気になった場合の多くはその人自身が罪人であると考えられることになる。」[11]

しかし一九七七年に「前産業化社会」に限定して記述された「犠牲者非難」という現象は、未開と文明、開発途上と先進、周縁と中心といったカテゴリーで示されるような文明・経済の発展段階、もしくは過去・現在という時間軸に関係なく生じているものである。例えば「犠牲者非難」は一九八〇年代にエイズをめぐって米国で生じている。

ランディは「前産業化社会」に限って一般化してしまったのだが、[12]こうした「前産業化社会の人々は犠牲者非難をする」という表現「だけ」で終わるならば、多かれ少なかれ人間一般に当てはまる事象に言及することになってしまう。そのため「前産業化社会」という限定条件はかえって違和感を生み、それならば「あらゆる人間（社会）は」という文章に差し替えた方が良いように思える。

しかしここで確認したいことは「人間」が一般的に持つ傾向を強調して「人は皆同じ」と言うだけで満足することではない。逆に「所変われば品変わる」を持ち出してきて「人は皆同じ」を全否定する事でもない。問題にしたいのはその説明方法である。

つまり人間の一般的傾向・通常性を時代や場所を限定して示すだけでは何か説明したことにはならないし、通常性を個別性と同一視することもできない。今回の場合には、米国に「犠牲者非難」があると説明するだけでは一般的すぎて不十分であり、逆に「犠牲者非難」は米国にしかないと説明することは当然誤りとなる。

ここで重要となってくるのが「米国の犠牲者非難」を説明するこ

とであり、その際に用いるのが文化分析である。それは米国文化という「意味と象徴のシステム」内における「犠牲者非難」の組み立てられ方やそれが生じるプロセスの独自性を示すことである。

そしてこの「米国の犠牲者非難」を構築し独自性を与えているのは、根底的には米国「個人主義」という文化的資源である。そしてエイズ直前までにその文化的資源により構築されていた「ライフスタイル」概念もまた、エイズによる「米国の犠牲者非難」に対して影響を与えたのである。

それではこれから、エイズによって生じた「米国の犠牲者非難」を決定づけることになる文化・歴史的背景の特徴を、「ライフスタイル」概念を軸に置き、文化分析を通じて示していく。

Ⅲ　米国のエイズ問題とその解釈

まずはじめにエイズ発生後の米国の状況を簡単に見てみるが、単に現状を報告するということはしない。その代わりに、彼らがいかにエイズを解釈しているかを解釈する文化分析の方法を使い、米国文化の土台とも言えるテーマを明らかにする。そのテーマに関する議論は、米国においていまだ決着をみていない。エイズはそれに触れたために激しい反応を引き起こしたのである。

エイズの経歴と特徴はそれぞれがあらゆる方面にインパクトを与える内容を持っている。最初に男性同性愛者に圧倒的な割合で患者が現れたこと、根本的な治療薬がないこと、潜伏期間があること、死亡率が高いこと、などである。ひとつひとつの特徴だけを見れば他の病気に見られるものはあるものの、これだけ同時に抱えているものはまずないと言って良いだろう。こうしたエイズの持つ多方面への影響力は次の引用でも示されている。

「エイズは、米国社会を分断している多くの社会的・政治的問題を私たちに吟味させ、そして医学的・社会的援助のシステムが抱えている多くの弱点と欠点を強調することとなった。」[13]

このことは「エイズを何の問題と見るのか」という問題設定が幾通りにもおこなわれていることをも同時に意味している。例えば米国保険制度の不十分さを指摘する者がいる。「性的表現のもっとも親密な行為が死につながるとき、人々はいかに『愛し合える』のだろうか」と問う者は文学の古典にその答えを求める。「社会的に構造化された不平等、ジェンダー支配、不当な特権、そして選択的に市民の自由を制約することにより法、秩序、公衆衛生を維持しようとするイデオロギー的意図」を終焉させることとエイズ問題の解決を同一視する者は「エイズに対する戦いは搾取的で協調性を欠く組織的条件に対する戦い」になるとみる。[14]

もちろん問題設定が同じであっても、その解答は様々に用意されている。非常に米国的で、また極端な例を紹介する。

「民主党にとって、エイズは福祉予算の大幅削減によってもたら

された災いの一つだった。一方、共和党にとっては、この流行病はリベラル派の俗っぽいヒューマニズムによって育成された性的放縦の当然の報いとして、リベラル派が本当は気にもとめない人びとを襲ったのだった。こうして、共和党政権の時代に広がった疫病は、共和党にとっては明らかにその元凶は民主党にあり、一方、民主党にとってエイズは共和党の疫病だった。」[15]

このようにエイズ問題をめぐる解釈（エイズの問題化とそれへの解答方法）のあり方をみていくと、舞台となっている場の社会・文化的状況の特徴が見えてくる。米国のエイズへの反応は、例えば日本のそれと比べても、多様であり数量も圧倒的である。この理由の一つとして、米国社会・文化が根底的に持つセンシティビティにエイズが触れたことが考えられる。つまり「個人の権利対公共善」「個人主義をめぐる解釈」という米国文化にとって最重要でありながら統一見解がない永遠のテーマであり、それゆえに絶えず議論されているものにエイズが関わったのである。「エイズを何の問題と見るのか」という問いはこの既存のテーマへと絡み取られていく面を持っている。例えば、米国におけるエイズ関連の政治運動や圧力団体の活動が持つ特徴は、様々な要素が交差していることである。次に引用したある団体の要求はそのことをよく示している。

「ヘルスケアと試薬へのアクセス、匿名検査の実施、入国と出国の自由、レズビアン・ゲイの権利、女性の妊娠・出産の権利、強制テストと隔離への反対、『ＨＩＶ感染者が属するコミュニティが彼ら自身に影響を及ぼす意志決定をする場合には、彼ら自身が積極的にその決定に参加できること』」[16]

またエイズを含めた健康のための闘争と「第三世界の自由化運動、反レイシズム運動、職場の衛生と安全のための運動」とを「社会変革のための闘い」として同じカテゴリーに含める者もいる。[17]

このように米国で以前から盛んだった権利闘争にエイズが組み込まれているために、エイズが関わる運動においても彼らの戦略は以前のものとあまり変わらないと言われたりする。しかし、うまく組み込めたためにエイズに対する彼らの反応や運動が過激とも言えるほど盛り上がったとも言えるのである。このことは直ちに彼らと逆の立場の人々にも当てはまる。一九六〇～七〇年代に米国で生じた家族の意味やその構成、女性の役割、性に関する現代的でリベラルな変化に対して反対してきた多くのグループにとっても、エイズは彼らの運動や反応を加速させる契機であった。例えば「道徳多数派（モラル・マジョリティ）」に代表されるキリスト教原理主義的思考はエイズ出現時に「犠牲者非難」を道徳的言語で広めたのだが、そこでは以前からの主張を、例えば同性愛を道徳的退廃とする主張を強調し繰り返したのである。

Ⅳ　米国「個人主義」とその解釈

ここでは前章で述べた米国文化のテーマに統一見解がないとはどういうことかをまずみていく。それは米国「個人主義」の解釈に関わる問題であった。「個人主義」は、米国人はいかに生きるべきかという問いに答える文化的資源であり、彼らが生を営む、つまり世界をつくりエトスで満たすために必要なものである。それほど重要なものでありながら、それをめぐっては解釈の揺れがおこっているのが現状である。これからR・N・ベラーらの『心の習慣』[18]を利用して、米国人はいかに「個人主義」を解釈しているのかを解釈していく。

『心の習慣』は、米国の「個人主義」は決して内発的なものではなく、それが「反伝統的たろうとすることじたい、個人主義的伝統の一部」であることを示している。例えば「リベラル対保守」という対立も米国が「共有する個人主義の理解の仕方の相違に由来している」ものであり、「この対立は深刻な政治的結果をもたらすものではあるが、本来は政治的というよりもむしろ文化的なものである」と指摘されている。

佐々木もまたこの対立を米国特有のものと見る。[19]枠組みの「リベラル対保守」はヨーロッパの「自由主義対保守」と一見同じように見えるが、その内容は全く正反対な面を持つ。例えば、米国の保守主義は夜警国家的な小さな政府を主張し、政府の介入をできる限り押さえようとする。しかしヨーロッパでは、それは自由主義の主張であり、保守主義のものではない。

この「奇妙な保守主義」は、米国の保守主義が保守すべきものとされる中心価値は自由であり、ヨーロッパ型保守主義のように貴族制・身分制ではなかった点に起源を持つ。つまりこの「自由主義の枠内でのみ存在を認められる」保守主義という特異な形態が出現したのは、いわば「文化的圧力」[20]の中なのである。一方ニューディールに代表されるリベラリズムもまた「アメリカ伝統の自由と平等を奉じ、その意味で保守主義と共通の基盤を持っている」と言える。つまり米国の保守主義とリベラリズムの違いは自由や平等という価値の解釈の仕方、重点の置き方にあり、「その境界線は甚だ微妙であるとともに流動的とならざるを得ない」のである。

こうして佐々木の政治分析もまた、米国における政治的対立の原因は、根本的に対立する政治形態のぶつかりあいというよりは基本的価値の理解・解釈の違いにより生じていることを示している。

再び『心の習慣』に戻るが、そこでは米国の文化の核心に位置する個人主義的伝統が四つに分類されている。それらはいかに生きるべきなのかという生き方の指針となる個人主義に対する四つの解釈であり、それぞれ聖書的・市民（共和主義）的・功利的・表現的個人主義と呼ばれる。四つのものが共有する根底の理想、出発点は次のように表現される。

「これらの伝統がいかに相違していようとも、またそこから来る個人主義の理解がいかに相違していようとも、そこには共通する要素もまたあり、それがアメリカのアイデンティティーの基礎となっている。すなわち、私たちは個人の尊厳を信じている――いや、そ

の聖性さえも信じているのである。自ら考え、自ら判断し、自らの決定を行い、自ら適すると思う人生を送る私たちの権利を侵害しようとするいかなるものも、道徳的に誤りというだけでなく、冒涜と見なされる。」

ではこうした四つの個人主義とはいったいどのような特徴を持つのだろうか。

聖書的・市民的なものは個人主義とはいえ、より大きな全体性に対する知覚を持っている。その全体性は神であったり、公共善に貢献する市民の集まりである政府であったりする。しかしそこにおいては、個人の自立性は道徳的・宗教的義務という文脈の中に位置づけられ、ある条件のもとでは自由だけではなく服従もまた正当化されるという特徴を共通して持っている。

功利的・表現的個人主義は先のものが内在していた不平等（夫と妻、主人と従僕、指導者と信奉者、富めるものと貧しいものの間にあった権利と義務の不平等）を、個人の尊厳をさらに追求するという形で、批判していった。

功利的個人主義と表現的個人主義の違いは、個人が行動する際の動機の解釈が異なるところから生じる。前者は、人間生活では個人はある目的に関して自己利益最大化の努力をとるものであり、社会は自己利益増大のためだけに個人が加入する契約により出現するものと見る。この性質から経済的な理解と親近性を持つ。後者は、個人は感情と直感の独特の核を持ち、個性実現のためにこの核を展開し表現するのが人生であるという立場をとる。そのため計算や利益といった人生に明け暮れる功利主義的個人主義への対抗的な側面を持っている。

歴史的に見れば功利・表現的個人主義が聖書・市民的個人主義を犠牲にしながら勢力を伸ばしてくる。それには社会・経済的発展という新しい状況が関連してくるが、聖書・市民的個人主義が現在において完全に過去の遺物になったわけではない。

そのためにこの四つのバランスをいかにとるか、個人主義をいかに解釈するかで「リベラル対保守」や「個人の権利対公共善」というスペクトルの中のその人の位置取りが決定されるのである。

V　「自己表現」としての「ライフスタイル」の出現
——「個人主義」解釈の先鋭化——

前章でみた米国文化の「個人主義」は、本稿で対象とする一九六〇～七〇年代にはある一定方向に解釈が先鋭化してくる。それは、よりラディカルに「個人」を強調する方向であり、その流れの中で「自己表現」としての「ライフスタイル」概念も生じてくる。

「パーソナル・コントロール・ムーブメントやオルタネイティブ・ライフスタイル・ムーブメントなどと様々な名で呼ばれるものとともにライフスタイル概念の大衆化は一九六〇年代に始まる。個人が『自らのことを自らおこなう』権利に対して賛同する新しい世代

の批判者達により因習的な価値、規則、そして生き方の多くが攻撃された。」[21]

この引用で示されているように、伝統や因習に対する反抗・カウンターカルチャーという形をとったこの動きは一九六〇年代の米国を席巻し、あらゆるものを批判の対象にしていく。一九八〇年初頭のエイズ発生にいたるまでの二十年間は、それまでの慣例が打ち破られていくという変化が急激に生じた時期である。それは家族の概念やその構成の変化、社会において女性が果たす役割の拡大、性的道徳観の変化から黒人差別撤廃を求める公民権運動まで様々な面に見られた。抑圧されていた権利の主張だけではなく、大学紛争に象徴されるように支配体制をうち崩すという運動にもつながった。

そんな中で、生き方、食事、仕事、性生活、何にしてもある「ライフスタイル」をとるということはひとつの「自己表現」であるとして受け入れられる土壌がつくられる。[22]

なかでもフェミニズムやゲイ・リベレイションとして顕在化する性をめぐる動きは大きな影響力をみせる。そこでのテーマは誰が誰の身体やセクシュアリティをコントロールするのかというもので、彼らの答えは当然「個人にこそ、その権利が存在する」というものである。自分以外に一体誰が自らの身体や生き方を統制し指示するものがあり得るのだろうか。国家か伝統か。とんでもない。そんなものに囚われていては本当の自由とは言えない、ということである。

ここでは「個人の権利」が「自己表現」をおこなう権利とみなされる。それは「ライフスタイル」という言葉に結びつきその意味内容となる。こうして「自己表現」としての「ライフスタイル」は伝統・文化・規則・因習にとらわれず、自由にそして内発的に生きる積極的・自主的・「個人主義的」な生き方とされる。ある「ライフスタイル」をとるのはその人自身の判断であり、決定であるという考え方が根づき、説得力を持ったのである。

しかしこの時期に慣例が打ち破られていったとはいうものの、根本的な米国の価値や精神が完全に破壊されたというわけではない。逆に、この時期の米国に「個人主義」が新たに出現したという理解も成立しない。その建国以来「個人主義」は米国の精神的支柱となっているからだ。

では一九六〇年代に何が起こったのか。「個人」をより強調する個人主義が先鋭化していったのである。それはある個人主義の解釈より別の個人主義の解釈が活発になっていく時代と言える。[23] 一九六〇年代におこった一連の運動は「伝統からの離脱」「自由」を実現したと宣言される場合もあるが、実はそれは米国的文化・伝統である「個人主義」の一部でしかない。[24] そのためこのような時代に現れた「ライフスタイル」もまた「個人主義」という「文化」の「特定的」発現と見ることができるのである。

こうして「独自独行」や「成功こそ道徳的に善である」という米国的個人主義に馴染みのあるテーマとあいまって、自らの意志で選択し行動するという「個人」をより強烈に打ち出す個人主義が先鋭化していった。個人のまわりに存在する外的要因を矮小化し、個人

のとる選択や行動、つまり個人の「ライフスタイル」はその個人自身の責任にあることが強調されることになっていく。そのために、ここでは自らの行動選択の幅は広がるものの、その行動が失敗したときの責任は個人にのみ負わされることになる。つまり成功も失敗も原因は個人に還元されるのである。それは病気の場合には病人に対する「犠牲者非難」を「ライフスタイル」の失敗という明確な言語で表すことになる。

こうした「犠牲者非難」的論理は机上において「個人主義」を突き詰めていけば出てくる。しかしここで重要なことは、この時代に生じたものは単なる論理や抽象ではなく、影響力や説得力を伴った現実であるということである。米国人の生き方の指針となる「個人主義」によって組み立てられた「自己表現としてのライフスタイル」は現実で力を持つことになった。しかしそこから生じることになる「犠牲者非難」も同様の結果を得ることになる。つまり文化的に承認され「リアリティ」を持つことになるのである。

Ⅵ　公衆衛生学の「ライフスタイル」論

米国文化内において、より「個人」を打ちだす方向に「個人主義」の解釈が進んでいく時代には、公衆衛生学の方法論も「ライフスタイル」予防法の確立により同様の傾向が強まっていく。二つの「ライフスタイル」論が見せる傾向の一致に何か確固たる因果関係があるのかどうかは、今の時点では筆者には判断できない。ただ、公衆衛生学的「ライフスタイル」論はこの時代に生じたから個人を強調する傾向を持ったとは「単純に」言えない。なぜならその性質は、社会科学において行動科学が主流を占める流れや疾病分布の変化に影響を受けているからである。

それではまずはじめに米国の社会科学における行動科学の隆盛を簡単に追うことにする。この動きは「ライフスタイル」概念を単純に「行動パターン」を示すだけの言葉にしてしまうのである。

（一）行動科学的分析・記述概念

二〇世紀前半の「ライフスタイル」前史といったものを見てみれば、「ライフスタイル」に至るまでの道には大きく言って二つの線があらわれる。それは集団に焦点を絞った社会学的な使われ方と個人に注目する心理学的なものである。前者には職業集団などの社会的地位のカテゴリーをあらわすものがある。後者にはA．アドラーの個人心理学理論のものがあり、そこでは「個人」は「人生・生活においては目的を持つ行為者」とされ、個人の独自性や方向づけられた目標を表現する場として生活様式が捉えられていた。こうした基礎づけからその後の世代はそれぞれの方向に「ライフスタイル」を進ませる。つまり一九六〇年前後には社会学者は、労働者階級や都市近郊の「ライフスタイル」といった社会的・文化的集団の研究を行った。また一方、心理学的な方向として「ライフスタイル」概念は「パーソナリティスタイル」研究に適合していった。[25]

では米国内に視点を移してみよう。一九六〇～七〇年代には社会

科学の分野において人間の「行動」についての研究、つまり「行動科学」が主流を占めはじめたことがその特徴である。目立ったものとしては第二次世界大戦後の「社会工学」の隆盛があるが、それは様々な問題領域を対象としていった。

「問題を発見し、それの解決に必要な研究計画を組織し、解決を指示するという、専門家集団のこうした活躍は社会福祉に止まらず住宅問題、非行問題、都市再開発、教育等多くの領域に及んだ。そこにはまた行動科学の成否がかかっていた。」[26]

しかしここには、社会におけるあらゆる問題が社会工学的行動科学により解決できるというオプティミズムが潜み、また人間の行動に問題原因を設定し、社会問題解決のためには個人の行動変化を促すプログラムを作ればよいという安易な前提があった。さらにそれは、人間の行動を包括的に捉える視点が欠如したもの、つまり文化的・経済的状況という個人が行動する文脈や「場」を軽視した「個人主義的」なもの（問題の原因を個人の行動に見る、人間を社会文化的文脈から切り離す、という意味で個人主義的）であった。結局社会工学はジョンソン政権下での「貧困との戦い」の失敗とともにいっせいに非難をあびせられることになった。

こうした行動科学の隆盛は「ライフスタイル」概念に影響を及ぼしていく。人間の行動を「ライフスタイル」という語で説明するのだが、その際に「行動パターン」が「ライフスタイル」と同一視され使われていくのである。また人間に行動変化を引き起こさせるプログラムを組む社会工学・行動科学的戦略は、同様のプログラムを持つ公衆衛生学的実践にも影響を与えている。つまり戦略の前提となる人間行動の個人主義的捉え方、また行動パターンとして「ライフスタイル」を捉えることなどを共有しているのである。

（二）公衆衛生学的「ライフスタイル」論の「個人主義的」傾向

公衆衛生学的「ライフスタイル」論は、その特徴のひとつとして、「個人主義的」傾向を持っている。それでは、どういう意味でそれが「個人主義的」であると言えるのであろうか。

まず公衆衛生で使う「ライフスタイル」概念は行動科学的である。そのために前節で述べた行動科学が持つ「個人主義的」傾向をそのまま持っている。その「ライフスタイル」の内容は人間の「行動」に重点を置いており、病気や事故死の危険要因として同定される特定の行動（例えば喫煙、アルコールやドラッグの使用習慣、体重管理からシートベルトの装着にいたるまで）という狭い意味で使われている。「自己表現」としての「ライフスタイル」が持つ意味の広さとは非常に対照的である。しばしば「ライフスタイル」という言葉とともに「文化」という言葉も使われるが、「行動の差」を単純に「文化の差」とする典型的な行動主義的文化観を見せる。また環境への適応として「文化」をとらえる生態人類学的な観点も持っている。しかし「人々に行動の変化を引き起こさせる」公衆衛生学的実践に対して、こうした「文化」概念がどれだけ有益なものかは非

常に疑問である。[27]

また「ライフスタイル」論は「伝統的」公衆衛生（環境・制度・社会といった外的要因から予防に接近する方法論を理想とする立場）からよく批判されるが、そうした批判の多くはその「個人主義的」傾向に対して向けられている。この場合どのように「個人主義的」であると批判されているのであろうか。

それは「ライフスタイル」論が予防医学と同列の方法を取ることに関連している。ワクチンなどの化学物質か「正しい知識」という科学的知識かの違いはあるものの、両者は外的要因を軽視し、個人に対して予防手段の介入を集中させる点で共通しているのである。この文脈において、「伝統的」公衆衛生の環境アプローチと対比される形で「ライフスタイル論は個人主義的でありすぎる」との批判がなされている。また「犠牲者非難」との関わりでも、その「個人主義的」傾向を指摘される。病気にならないためには個々人が気をつければよい、逆に言えば病気になるのは一定の「ライフスタイル」をとり続け、行動を変えない個人の責任であるとする「犠牲者非難」的見方が「ライフスタイル」論に潜んでいると言われる。これは「自己表現」としての「ライフスタイル」に内在していた「犠牲者非難」の論理と同じである。しかし、公衆衛生学的「ライフスタイル」論の場合には「『正しい知識』を与えられた人間は当然自ら危険を回避する」という個人主義的で、さらに科学合理的な人間観が前提とされ結果となっている。[28]

こうして人間を社会や文化といった大きな文脈から切り離し、科学合理的・自律的に行動するものだと考えている点が「個人主義的」と言える。

（三）公衆衛生学的「ライフスタイル」の出現

最後に「ライフスタイル」論が公衆衛生の中心を占めてくる流れを、まず疾病分布の変化という歴史から、次に公衆衛生内部の文脈から捉えてみる。

一九世紀末から一九五〇年代にいたる細菌学とそれに続く免疫学の進歩は地球上の疾病分布パターンを塗り替えてしまい、「科学の勝利」と呼ばれる時代を築き上げる。それまで治療や予防ができずに大量の死亡者を出し続けていた感染性疾患が次々とこの時代に人類の脅威ではなくなっていったのである。

代表例をあげると、ペニシリンの発見（一九二八年）は多くの細菌性疾患の治療に効果を見せ、ストレプトマイシンの発見（一九四三年）に続く、カナマイシンなどの発見は結核を治療可能にした。また免疫学の発展により一九四〇年代にインフルエンザ、発疹チフス、黄熱に対する有効安全なワクチン開発が可能になった。

こうしてそれまで何世紀にもわたって人類の脅威であり続けた死に至る病の多くが飼い慣らされた結果、感染性疾患による死亡率の激減を引き起こし、平均余命の延長に直接の影響を及ぼした。一九四〇～五〇年代には科学に対する信仰が人類の感染死からの解放という具体的成果を伴って頂点に達したのである。

しかし人類が病死から永久に解放されたわけではなかった。感染

性疾患の影響から逃れた瞬間、それまで陰に隠れていた慢性疾患が表面に浮き出てくるのである。

心臓病に代表される慢性疾患の増加と平均余命の延長という現象とは表裏一体である。なぜなら、それまで人類の多くは慢性疾患で命を落とす前に感染性疾患で死んでいたからである。例えば今世紀はじめにおける米国の三大死因は、第一位がインフルエンザおよび肺炎であり、第二位以下は結核、下痢及び腸炎と続いていた。すべて感染性疾患であり主に若年層に患者が多かった。ところが一九〇〇～五六年の間に結核、肺炎、流感による死亡率はなんと九〇％の減少をみせ、一九五七年の平均余命は一九〇〇年に比べて二十三年伸びている。一九五〇年代の三大死因は心臓病、がん、脳血管損傷という順位になっており、老人層の患者が多くなっている。[29]

科学進歩の結果、皮肉にも一九六〇年代には科学への楽観的な称賛の言葉は聞かれなくなる。前述した社会工学の失敗など、様々な要因がこの科学不信の雰囲気づくりに関わっているが、健康の分野では慢性疾患の増加がひとつの原因となっている。抗生物質やワクチンという科学の力では駆逐できないものが残ったのであるから当然といえば当然の結果である。

「ライフスタイル」論が一九六〇年代以降に公衆衛生で中心をしめるのは以上の疾病パターンの変動が契機となっている。

変動以前の時代、つまり感染性疾患という難解なパズルに明快な答えを用意した細菌学が発達する「科学の勝利」の時代に「伝統的」公衆衛生の存在基盤は崩壊を迎えていた。環境や社会の改革という大規模で金のかかることをせずとも、注射一本による予防や治療で人間は生き延びることができるとされたからである。しかし細菌学や免疫学による治療や化学的予防が通用しない慢性疾患の時代になると、行動に焦点を置き予防教育を中心とする「ライフスタイル」論が重宝されることになる。さらに戦後の米国におとずれた公衆衛生の没落は方法論的な失敗ではない、実際には役立っているにも関わらず成果のアピールに失敗したり政治に疎いことが公衆衛生の衰退に結びついているのだという反省もうまれていた。[30] こうした感染性疾患の時代におかした存在意義の証明失敗を次の時代には持ち越すまいという決意も原動力となり、慢性疾患の時代に「ライフスタイル」論を強く主張していくことになった。

こうして慢性疾患予防として確立された「ライフスタイル」論とそれを土台にした予防教育を感染性疾患であるエイズに流用した理由は、慢性か感染性かということよりも、予防の際に問題となる要因が重要視されたからである。つまりワクチンがないこと、予防には「行動」への注目が重要とされたことが決め手となったのである。

また、なぜ「ライフスタイル」論が公衆衛生の中心になってきたかは、「伝統的」公衆衛生と「ライフスタイル」論のうちどちらの方法論が予防に効果的なのかということを調べても、あまり明確に答えは出てこない。どちらか一方だけでは予防が効果的にならないということもあるが、それにもまして「ライフスタイル」論が出現してくる過程はかなり状況的だからである。

Ⅶ おわりに ――「犠牲者非難」の文化分析へ――

これまで追ってきた「個人主義」解釈の先鋭化による「ライフスタイル」の出現と、公衆衛生学内の「ライフスタイル」の出現という二つの流れの間に確固たる因果関係が存在したかどうかはともかく、ただ確実なのは米国では「個人」を強調する傾向がエイズ直前の状況を組み立てていたことである。また、そこで生まれた「ライフスタイル」概念は単に状況の写し鏡ではなく、現実に影響を与え、状況を作り出す決定的要素となったのである。つまり「ライフスタイル」という新しい「象徴」が米国文化内で生まれたと言える。

どちらの「ライフスタイル」概念も「個人主義」的な人間観を持っているため「犠牲者非難」を論理的に導くと言えるが、ただ論理・概念的に「個人主義」的なだけでは「犠牲者非難」は漠然とした姿をとるに違いない。しかし米国「個人主義」文化の持つ世界観とエトスの中に位置づけられた「ライフスタイル」という象徴で表現されることにより、「犠牲者非難」は、米国文化内において圧倒的な知的感情的リアリティを伴い立ち現れることになる。

米国という特定の文化的文脈において、エイズの「犠牲者非難」がいかに組み立てられたかを示し、その具体的事例を提示することは今後の課題である。しかし、それが文化的真空ではなく圧力の中で生じたことは、本稿が文化分析により示したエイズ直前の状況を考えれば理解されることと思う。また、文化的圧力の中で生じたことはラベル貼りに例えられる単純な「病気の意味づけ」ではなく、複雑な相互作用であり、文化的に構築される「リアリティ」と関連した深みのあるものだということも理解できるだろう。さらにこうした理解は、文化を完全に無視してしまうか、阻害要因や適応要因としてしかみない方法よりも、実践的（公衆衛生学的実践、そしてまた反差別への実践）に寄与するところが大きいと私は考えている。いずれにしても、文化分析により「文化」を正面から扱うことが重要となるのである。

注

(1) C.GEERTZ, The Interpretations of Cultures, 1973, BasicBooks, p.14.［吉田禎吾他訳『文化の解釈学Ⅰ』岩波現代選書、一九八七年、二四頁。］邦訳を参考にさせていただいたが、本文中の引用は田中が訳出したものである。

(2) 文化分析が文化人類学のすべてであるとは言えないが、その中心のひとつであろう。フィールドワークにもとづいた文化分析の実践例として、C.GEERTZ, "Person, Time, and Conduct in Bali,"1966, in C.GEERTZ(1973)'［「バリにおける人間・時間・行為――文化の分析に関する考察」『文化の解釈学Ⅱ』］または小泉潤二「マムの時間象徴　グアテマラの事例と文化分析の一方向」吉田禎吾編『異文化の解読』一九八九年、平河出版社、を参照されたい。また本稿で言及される「文化分析」は先の論文を参考にさせていただき、自分なりにまとめたものである。

(3) 引用文だけでは、訳文の関係上、通常性を明らかにすることに重点を置いているようにみえるが、すぐ見るようにそうではない。

(4) 例えば、進化論、構造・機能主義、文化相対主義、文化とパーソナリティ論、新進化論、構造主義などは「人間（普遍）と文化（個別）」の関係を捉えるそれぞれ独自の枠組みを持っている。ここでは同列に並べたが「理論」として同一線上にあるのでは決してなく、「世界における生（life）の多様性という事実」に向き合う際に示す独自の「態度・姿勢」を持つ点で同じ時元に並びうると考える。

(5) ギアツ解釈学の特徴を理解するためには次の論文を参照されたい。小泉潤二「ギアツの解釈」江淵一公・伊藤亜人編『儀礼と象徴』一九八三年、九州大学出版会。また本文中に「三つだけ」あげたのは紙幅の都合による田中の選択である。

(6) 小泉、同書、五二頁。

(7) 同書、五四頁。

(8) 同書、五五頁。

(9) 同書、五九頁。

(10) 「解釈」アプローチは文化分析だけに限られるものではない。文化分析を志向した研究ではなくても、例えばM．ウェーバーやC．ギンズブルグらの著作から、われわれは示唆を得ることができる。

(11) D.LANDY, ed.Culture, Disease, and Healing, 1977, Macmillan Publishing Co.,Inc., p.231.

(12) これはランディが人類学を未開社会（前産業社会）研究に限定し、さらに医療人類学をそうした人類学の下位分野としてしか位置づけていないことから派生する限界である。

(13) A.Ron and D.E.Rogers, "AIDS in the United States," DAEDALUS, 118 : 2, Spring 1989, pp.56−57.

(14) D.M.FOX, "AIDS and the American Health Policy :The History and Prospects of a Crisis of Authority," in AIDS The Burdens of History, 1988, University of California Press, p.339.

L.Brodsley, "Literature and AIDS :The Varieties of Love," in Principles,Practices,&Politics,1989,Hemisphere Publishing Corporation,p.389.

E.QUIMBY, "AIDS on the planet − The plural voices of Anthropology," Anthropology Today, 6 : 3, June 1990, p.14.（以上、引用順）

(15) R．シルツ『そしてエイズは蔓延した』上下巻、一九九一年（一九八七年）、草思社、下巻二一五頁。

(16) A.Sears, "AIDS and the health of nations — contradictions of public health," Critical sociology, 18 : 2, 1991, p.47.
この引用はACT UPとAIDS Action Now!という二団体が一九八九年の第五回エイズ国際会議に向けて発した「トロント宣言」の内容である。

(17) *ibid.*, p.42.

(18) R．N．ベラー、他『心の習慣』一九九一年（一九八五年）みすず書房。

(19) 佐々木毅『現代アメリカの保守主義』一九九三年、岩波書店同時代ライブラリー版。

(20) ベラー、前掲書、V頁。

(21) J.COREIL, and J.S.LEVIN, "A Critique of the Life Style Concept in Public Health Education," International Quartely of Community Health Education, 1985, 5 : 2, p.105.

(22) *ibid.*, p.106.

(23) こうした先鋭化は道徳的には性革命のような「反保守主義」という形を取るものの、経済的には「反福祉」「完全自由市場擁護」という保守に傾く。「リベラル対保守」の枠組みでみれば全く逆に生じるこの結果は、この時代の米国に見られる政治的両極化が特定の個人主義の先鋭化という根につながっていることを示している。

(24) このような言い方や注20の「文化的圧力」といった語の表面だけをとって文化を抑圧装置だとか、その環境を突破できない牢獄のようなイメージで捉えないでいただきたい。「文化」概念をどう捉えるかという問題にもなるが、右記のようなイメージは単純な機能主義的文化観や文化と人間を切り放した自然状態を想定する人間観に端を発しているように思える。

(25) J.COREIL and J.S.LEVIN, *op.cit.*, pp.104−108.

(26) 佐々木、前掲書、七五頁。

(27) この「文化」概念をめぐる問題は非常に重要であるが、本稿の主旨でないため、ここではこれ以上触れない。機会を改めて追求してみたいと思っている。

(28) 国際公衆衛生の失敗の原因のひとつに、こうした人間観を現地の人々や文化にそのまま無反省に適応しようとすることが考えられる。つまり自らが持つ文化的に偏向した人間観を人間の「なま」の姿と取り違えているのである。また何が危険であるかを判断するのは現地の実際の人間であり文化であり「理想的抽象的人間」ではない。

(29) 橋本正己『公衆衛生現代史論』一九八一年、光生館、一四五頁。

(30) E.Fee, "The Origins and Development of Public Health in the United States," in Oxford Textbook of Public Health second edition Vol.1., 1991, Oxford University Press, p.15.

AIDS and the "life-style" concepts in the context of the American culture.

—The cultural analysis of the American "individualistic" culture just before the emergence of AIDS—

This paper attempts to grasp the cultural situations in the U.S.A. just before the emergence of AIDS. It means to understand what happened to the American "individualistic" culture in the 1960-70's.This is the preparation for the study that analyzes AIDS, especially "victim-blaming", under the present circumstances. For the paper's purposes, it is essential to pay attention to the relationships between AIDS and the "life-style"concepts, because it is to realize the role of these new concepts in the period showed the radical interpretations of "individualism". So the paper scrutinizes two "life-style" concepts, the first is of "self-expression" and the second of the Public Health, and their cultural-historical backgrounds.

These new concepts have the particularity, because they were constructed, interpreted and recognized in the world view and ethos that the American "individualistic" culture originally has. So the "victim-blaming" that has emerged in the U.S.A. through these concepts after AIDS takes on the particularity.

And the cultural analysis in the paper will clarify that the "life-style" concepts, and the "victim-blaming" too, emerged not in the cultural vacuum, but in the "culture".

Key Words

AIDS, "life-style"concept, the American "individualistic" culture, cultural analysis, "victim-blaming".